
First love ~恋かもしれない~

桜桃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

First love ｝恋かもしれない｝

【Nコード】

N7418M

【作者名】

桜桃

【あらすじ】

First love

初めての恋。

初恋。

ある女の子の甘酸っぱい思い出

この話は、名探偵コナン 自作小説
にも掲載されています。

自己紹介

「神田菜乃です。

特技はフルート。部活は吹奏楽部に入ろうと思っています。
一年間。よろしくお願いします。」

私は清水咲。

帝丹中学の新入生。

今は無事、入学式が終わり、自己紹介の時間。
そろそろ私の番。

「工藤新一です。

趣味は読書、特技はリフティング。

部活はサッカー部に入ろうと思っています。
よろしくお願いします。」

きちつとした口調にりりしい顔立ち。

この人、本当に私と同一年！？

ドクン。

ドクン。

つと鼓動になる。

もしかして・・・

「次！」

「は、はい！」

いけない。
次は私だっただ・・・
はずかしい。

工藤・・・新一君・・・
私のこと、見てくれるかな？知って・・・くれるかな？

「清水咲です。

趣味、特技は絵を書くことです。部活は美術部に入ろうと思っています。

青森から来て、知り合いは居ません。仲良くしてくれるとうれしいです。

よろしくお願いします。」

席へ戻る途中、

私は工藤君をちら見した。

頬杖について、下を向いていていた。
まっすぐに綺麗な瞳が目映る。

一瞬で真っ赤になったのがわかった。

右斜め前の工藤君の後ろ姿。
たった一目見ただけに。
一目ぼれ・・・なのかな？

1人、また1人と自己紹介が終わる。

「毛利蘭です。

趣味、特技は家事、空手です。

部活は空手部に入ろうと思っています。」

「うそっ！」

「まじかよ・・・」

可愛い子が空手部！？

皆は口々に声を出し合う。

「ほら、蘭。愛しい旦那さまがいるというアピールもしなきゃ！」

「旦那なんかいないわよ！」

「そっぴや、工藤君も奥さんがいるってちゃんと一言も言わなかったわね。」

「俺は奥さんなんていた覚えはねえぞ。」

だ、旦那？

それに奥さんって！？

ぐ

誰かのおなかがなつた。

「わりいな！俺だ！！」

「あ、荒川・・・」

「朝食抜いてきたもんで・・・」

みんなは大爆笑

そのとき、

「朝食・・・」

毛利さんがぼそつと漏らす。

工藤君の背中がぴーんと伸びたがわかった。

自己紹介（後書き）

園子「なんで工藤君、奥さんがいますって言わなかったのよ！」

新一「言うわけねえだろ！」

園子「蘭だって言わないし・・・」

蘭「言わないわよ！第一、旦那じゃないし。」

桜桃：はあ。

園子が工藤君と言うのにはなれません・・・

高校生にすればよかったかも・・・

まあ、いいや！

次回もよろしくおねがいします。

朝食

「蘭？どうしたの？？」

毛利さんは下を向いている。

「朝食・・・」

毛利さんが2言目の『朝食』を言った。

そろそろそろり。

なぜかしら、工藤君が逃げようとしている。

「新一！」

「はい！」

誰かが怒鳴った。

工藤君を呼び捨て・・・

誰？ いったい・・・誰なの？

「いつからおじ様とおば様、スペインに行ってるの？」

「き、昨日の昼から・・・」

「へへ。どうりで、おいしそうな朝食のおいがないと思ったわ。」

びくん！

工藤君の肩が跳ね上がる。

しかも、汗がかなりと流れて・・・

「そ、それがどうかしたか？」

「そんなの、聞かなくてもわかるんじゃない？」

「きよ、今日はちゃんと、朝ごはん食べたから。」

「本当に？」

毛利さんは半目を開けている。

疑っているようだ。

「まあ、いいわ。今日新一の家に行けばすべてわかることだし。うそだったときは、わかってるわよね？」

「す、すみません・・・」

「なにをあやまつてるの？」

あくまでも笑顔・・・

「えっと・・・その・・・」

「はつきりしなさいよ。」

「だから、あの・・・」

「だから、なによ。」

「朝食は抜いてきました!!」

工藤君の声が教室中に響きわたる。

シーン…………

「抜いてきたあ!？」

「だから、あやまつただろ!」

「あやまつてすむ問題!？」

「しょうがねえだろ？新作の推理小説が・・・」

「口を開けば、推理、推理、推理・・・あんたの頭には推理しないの!？」

だから、おおばか推理之介って言われるのよ!」

「それ言ってるのお前だけだろ!？」

「なによ!人が折角心配してるのに!！」

「誰も頼んでねえよ!」

ピキッ

音がした。

「あちゃー、工藤君、いらんこと言っちゃったわね。」

鈴木さんがぼそつと言う。

毛利さんの雷が落ちるまで、

あと

5
秒
.
.
.
.

朝食（後書き）

咲 「工藤君ってどんな子なんだろ。」

桜桃 「好きになつたら、後悔するよ？」

咲 「え？」

新一と蘭の仲を認めさせる

ようにするには、説得力が必要。

でも、哀がない今。

説得力がある人がいないではないか！

つといまさら悩んでみたり・・・

雷様

「・・・・・・・・わよ・・・・・・・・」

「え？」

「ふざけんじゃないわよ!!!!!!!!
頼んでない? そうね、ごめんね。私が勝手にやったことだし!」

「あ、あのお・・・蘭さん?」

「自分で好きにすれば！？知らないんだから！栄養不足で倒れても
！！」

毛利さんは怒って席に着いた。

キンコーンカーンコーン・・・

「・・・きゅ、休憩に入ってください。
3時間目はオリエンテーションです。」

「悪かった！謝る！つい、出ちまっただ！本気じゃねえから！」
「・・・つい、本音が。じゃないの？」

「な、なあ、夕食・・・」

「自分で作れば。」

「苦手なの知ってるだろ？」

「知らないわよ。ぜんぜん。わかったら向こうについてよね。」

毛利さんの機嫌はまだ、直らない。

「あーあ、工藤君。蘭の機嫌はそうそう直らないわよ？」

「・・・はあ。」

「なあ、お前あの子とやけに仲がいいな。」

「うつせえ。」

「工藤と毛利は昔からそうなんだよな。」

「もしかして、恋人とか？」

「ちがうちがう。んゝむしろ夫婦？」

「本人は幼馴染の『つもり』みてえだけど！」

「「「あはははは。」」」

「うつせえー！！！！！！」

工藤君までご機嫌ななめ。

せつかくの初恋なのに。

大事に大事に育てたいのに……

諦めなくちゃいけないの？

雷様（後書き）

蘭 「新一があやまってくるまで知らない！」

桜桃 「あーあ。」

蘭 「一生懸命作った料理。おいしって言うてくれて嬉しかったのに、新一はあんなこと思ってたなんてショックで・・・」

桜桃 「たしかにねえ・・・早く仲直りしてよ？」

蘭 「あいつは私と仲直りなんてしたくないわよ！」

桜桃 「相当怒ってるね。こりゃ・・・はあ。」

密かに。

「じゃあな、工藤！」

「ああ。」

「またね！蘭！」

「うん。明日ね！」

一言も喋ってはいないのだが、

しっかり並んでかえる2人。2人の距離はおおよそ、5cm。

「ねえ、まっちー。2人って喧嘩してたんじゃない？」

まっちーは工藤君と毛利さんとは小学校が一緒。

「え？ああ、2人ってばむかしっからそうなのよ。」

「むかしっから？」

「そうそう、俺なんか、腰抜かしことあるぜ？」

「こ、腰抜かす！？」

「そうそう、海田君ってば、2人が1時間目から喧嘩しててね、下校時間になったら、2人とも一緒に帰るのよ。だから、聞いたの。喧嘩してなかった？ってしたら、してるって言うのよ？」

「は！？」

「意味わからないでしょう？そしたら、蘭ってば、帰る方向が一緒だから。」

「っていうし。」

「そうそう、普通、帰る方向が一緒だからって一緒にかえらねえよな。」

「それでこいつ、腰抜かしたんだよな。」

小学校から一緒の人は口々に2人のことを喋り始める。

「まあ、2人の歴史はこれからなんじゃない？」

「園子の言うとおりね。どんどん冷やかしてやりましょう！」

おー！

っと盛り上がる。

「でも、ざんねーん。工藤君、密かに狙ってたのになあ。」

「麻由美。でも、確かに工藤君、かつこいいしねえ。」

「かつこいいけど、毛利のもんだって。俺のしとかない？」

「だあれがあんたなんか選ぶのよ！」

「俺はお前に言っただけよ！誰がデブに頼むかよ！そこまで落ちぶれて

ねえよ！」

「悪かったわね！デブブスで！！」

笑い半分怒り半分の話が私の前で繰り広げられた。

麻由ちゃん、工藤君を狙ってたんだ・・・

ジェラシー

「咲く。お醤油買ってきてくれない？」

「はあゝい。」

とくに何もすることはなかったが、
なんだかやる気がおきない私の体は
ずっしりと重たく、

だが、お母さんの頼みごとを断りはしなかった。

くスーパーく

「えっと、お醤油、お醤油・・・」

あった！あとは、バターと・・・」

つたく、お母さんつたらお醤油って言ったくせに違うものまで
買わせるんだから！

「あれ？清水さん？」

「も、毛利さん!？」

「清水さんもお買い物？」

「あ、うん・・・」

「そっか。うちの晩御飯ね、カレーとかぼちゃサラダ。ハンバーグと野菜あえなの。」

「は!？」

「ちょ、ちょっとまって・・・」

「主食が2つもはっていたような・・・」

「あ、ごめんね。カレーはお父さんので、ハンバーグは新一のなの。」

「へ、へえ・・・」

「工藤君の・・・晩御飯・・・」

「おつかいかあ・・・うちも、お母さんに言われてね。」

「お母さんか・・・いいね。」

「え？」

「あ、清水さんは小学校が違ったね。」

お母さんね、私が小さい頃、出て行ったの。」

「うそ・・・」

「でもね、ちゃんと会ってるのよ？」

いわゆる、別居。

お父さんとお母さんも意地っ張りだからなかなか仲直りできなくて・・・

たまに、ばったり作戦とかするんだけど・・・」

「ばったり作戦？」

「うん。偶然をよそおって2人つきりにするの。」

・・・なんて健気なこなんだろ・・・

いまどき、こんな中学生がいる！？

絶対いないわ！

「そうなんだ・・・でも、料理とか大丈夫なの？」

「ああ、うん。私のお父さんとお母さんと新一のお母さんは幼馴染だったの。」

でね、お母さんが出て行つたと知つた新一のお母さんは私に料理を伝授してくれたのよ。」

ズキツ・・・

じ、じゃあ、毛利さんの料理は工藤君にとって、
”おふくろの味”

的なんかじ？

どうりで工藤君が毛利さんの料理を食べるわけだ。
じゃなきゃ、いくら幼馴染だからって・・・

ああ、どうしよう。

私、だんだんいやな奴になつてる。
こんな優しい毛利さん相手に
醜いジェラシーを抱いてる。

恋したらこんなにも変わるの？

私は、

私は、私自身が怖い・・・

ジェラシー（後書き）

桜桃「恋したら変わっちゃうなんて・・・」

友C「そんなことないって。」

桜桃「いや、あんたげんに好きな人で来て変わっちゃったじゃん。」

友C「そうだっけえ〜?」

桜桃「こ、こいつ・・・」

友C「こいつって言われたあ〜!! ねえー! B - ! !」

友B「なんだ?」

友C「こいつっていわれたあ〜!」

友B「ふっ。お前は所詮、その程度の女ってことだ。」

友C「なにそれ!!」

友B「なんだよー!!」

桜桃「終わりそうにないってか、これ以上ひどくなりそうなので、強制終了!!
次回もよろしく願います!」

友B C「勝手に終わらせんなよ!!」

日に日に・・・

私は、日に日にいやな奴になっている。

絶対・・・

すべて、それが毛利さんのせい。

っと思ってしまうほど。

「キヤー！工藤君！！」

サッカーをしている工藤君。

さっきなんか、休憩中に毛利さんから水筒、タオルを貰っていた。

お昼のお弁当も毛利さんお手製なんだろう。

とってもおいしそうだった。

周りの女子は、怒りに燃えている人もいれば、

ほほえましく見ている人もいた。

多分、ほほえましく見ている人達は、同じ、小学校なのだろう。

「工藤！ゴール決めろー！！」

「かつこよくねー！！」

生徒の応援の中。

バンッ

工藤君は次々にシュートを決める。

「キャー!!」

「イエーイ!」

歓声をあげる人や、友達と抱き合い、喜び合うもの。
たくさんいた。

「相手ボールのままだわ・・・」

「工藤、なにやってんだよ・・・」

皆くやしい表情。

「あっちゃー。完全に遊んでるわね。」

「うん。むかしっからすきだからね。」

後ろを見ると、毛利さんと鈴木さんがいた。

「遊んでるって?。」

「ああ。蘭、言ってやんなよ!。」

真由ちゃんが聞いていた。

「新一の顔見たら、わかったことなんだけど、
もっと上手くできねえのかよ。とか考えてるみたいで、
飽きたらさっさと奪ってシュート。
みたいなのをしてるのよ。さっきからね。」

「工藤君が?。」

「うん。」

つとそのとき、

なんかの物体がこちらへときた。

サ、サッカーボール!?!?!?!?!?!?

思わず避ける。

(あ、当たる・・・)

バンッ！！

(いった・・・くない！？)

「蘭！？蘭！！」

慌てて私は後ろを見た。

ボールは下に転がり、顔を押さえている毛利さん。

「だ、大丈夫。心配しないで。」

涙目の毛利さん。

ふふつ。

いい気味。

工藤君を独り占めするから・・・

また。

まだだ・・・

私、本当に嫌な奴になってる・・・

どうしよう・・・

「蘭！」

工藤君が駆けてきた。

「コントロール誤ったの、相手チームの中原って人だって！」

「工藤君に取られまいと、むきになったからよ。」

ひそひそと話しはじめる。

「わ、悪い！大丈夫か！？」

多分、中原ってひと。

がこちらへときた。

「大丈夫なわけねえだろ。」

「え？」

「蘭、立てるか？園子、保健室。」

「う、うん。」

毛利さんは鈴木さんに連れられて、グランドを出た。

「おい。」

「え？」

「蘭の顔に傷1つあったら、お前の命はないと思え。
俺がぶっ殺しに行くからな。」

今までに聞いたことのない低い声。

ぞくつとするほどの冷たい目。

多分、同じ小学校の人たちもみたこともないのだろう、
冷や汗をかいているひとがほとんどであった。

勿論、

教師も
・
・
・
・

日に日に・・・（後書き）

園子 「あっちゃー！新一君、こんなこと
言ってたんだ・・・聞きたかった!!」

桜桃 「あはは。って、高校生の園子!？」

園子 「なによ、悪いの？」

桜桃 「い、いや、全然!」

園子 「あ、そう。それにしても、新一くんの言葉！
聞きたかった!!本当に!」

桜桃 「いいじゃん、今聞けたんだし。」

園子 「生じやなきやいやよ!!」

桜桃 「あ、ああ・・・そう。」

こうなるまえに。

自分で自分がいやな奴になっていることがわかる。

毛利さんにジェラシーを抱いているのもわかっている。

毛利さんがもつと嫌な人なら、あたりようがあるけど、

そんなのひとつもない人だけに、私はどんどん悪態化している。

＊＊保健室＊＊

「も、毛利さん？」

「あ、清水さん。きてくれたんだ。ごめんね、心配かけて。」

「う、ううん。それより、大丈夫なの？顔。」

「大丈夫よ！ほら、このとおり。」

きれいな顔を見せてくれた。

「なあに言ってるのよ！大丈夫なら、この傷はなに？」

鈴木さんが指を出した場所には真っ赤にはれた毛利さんの顔があった。

「そ、園子！」

「なによ、工藤君には言うわよ。」

「だ、だめ！！心配かけちゃう・・・」

「いやあよ。私が工藤君に怒られちゃうもの。」

「おねがい・・・」

おねがい。と言った毛利さんは涙目だった。
鈴木さんはわかったといったが、ぼそつと
どうせ、工藤君にはばれると思うけど？？と言っていた。

「清水さんもごめんね？これくらいの怪我で心配させて。」

いや、これくらいと言うのには程遠いくらいの怪我。

「そんなのこないよ。病院いったほうがいいんじゃない?」

「ありがとう。やさしいだね。」

毛利さんは微笑んで言った。

そんな、私はやさしくなんかない。

だって、毛利さんが怪我をして、喜んじやつたんだよ?

一瞬の気のゆるみかもしれないけど、きっとそれは

本音だと思う。

そんな私をやさしいと言うの?

毛利さんのほうが優しいよ。

「私も病院行こうと思ってたの。

心配してくれて、どうもありがとう。

うれしいよ。」

お願いだから・・・

お願いだから、そんな優しい、天使のような笑顔で私を見ないで。

今の私はすつごくみにくいから。

ジェラシーで、欲でいっぱいだから。

今の私には貴方の笑顔は苦痛になる。

こんなこと言っちゃ悪いけど、

胸がしめつけられるように・・・痛い。

きっと、私。

今のままだと毛利さんを傷つけちゃう。

ひどいこと、言っちゃうと思う。

私の醜い思いをなんも悪くない毛利さんにあたっちゃう。

こうなる前に、こうなる前に、

元の私に戻らなきゃ。

偉大さ

「咲ー！聞いて！」

サッカーの試合を再度見ようと、グラウンドに行くと、

真由ちゃんが私に気付き、かけよってきた。

「どうしたの？」

「工藤君、相手チームに一点もいれずに、ばんばんシュート
きめちゃって、あつという間に、試合終了！」

「はー！？」

「先輩も、工藤君のパスを待ってたんだけど、
全部工藤君がゴール。

後半も5分足らずでおわちゃったのよ。」

「うそ・・・」

「本当よ！蘭ちゃんパワー最強だわ・・・すごすぎる・・・」

「・・・」

工藤君は保健室へ行こうとしているのか、

学校へと向かっていた。

私は、工藤君に言う事を思い出し、

真由ちゃんに一言言っ、走り寄った。

「く、工藤君！」

「清水？なんか用？」

「え、えつとね、毛利さんに怒られそうだけど
工藤君に1つ、言っておくね。」

「？」

「毛利さんの顔の怪我、ひどいみたい。
私、さっき行ったんだけど、病院行ったほうがいいほどだよ。」

「本当か？それ。」

「本当よ。これでも、医者の娘でいろいろと
教えてもらってるの。」

「・・・サンキュー！」

「どういたしまして。」

私に笑顔を向けた。

だが、走っていたときの工藤君はすでに、
殺意が芽生えていた。

「おい。」

「き、君は・・・」

「お前だよな。蘭にボールぶつけたの。」

「あ、そうそう。大丈夫だった？」

いままで忘れていたかのような口調をし、
心配するようなしぐさをする。

「大丈夫だった？傷、できてたよ。」

「え？」

「言ったよな、傷1つできてたら、お前をぶっ殺しに行くって。」

「じよ、冗談だろ？」

「冗談に見えるか？」

「・・・」

「見えるか？」

「き、傷1つくらい、いいじゃないか。」

どうせ、たいした怪我じゃないって。

君も心配性だな・・・怪我くらいで、死なねえって!」

「ふざけんじゃねえええ!!」

胸を掴む。

「やめて!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

殴りかかろうとしていた工藤君に毛利さんが止める。

なぜ、毛利さんがいるのかというと、

私は、危険を感じ、毛利さんに話し、

鈴木さんが、きっとここだろうと、教えてくれて、来たところ、

工藤君は他校の男子に殴りかかろうとしていた。

「ら、蘭!？」

「やめて!だめだよ、新一。」

私なら大丈夫だから。殴っちゃだめだよ。」

「・・・」

「どんなに、相手が悪くても、どんな事情があろうとも、殴ったほうが悪くなるんだよ。」

優しく、優しく言う毛利さん。

「ね、落ち着いてよ。新一。」

「・・・わかった。だが、お前ら、次はねえからな。」

「は、はい！」

「くすつ。」

毛利さんがなぜか、笑った。

それにしても、

さっきまですごい剣幕で、殺気丸出しだったのに、

毛利さんの言葉で元通りになるなんて、

毛利さんの偉大さはすごいと、私は思った。

偉大さ（後書き）

桜桃 「どうして笑ったの？」

蘭 「だって、なんだかんだ言っ
て、新一はお人よしだから、許しちゃうんだろうなって思っ
て。」

桜桃 「蘭にお人よしと言われる新一って・・・」

蘭 「でも、どうして新一が怒ったんだろう。」

桜桃 「は!？」

蘭 「あ、わかった!

私の間抜顔が見れないからね!
そうよ、きつと・・・いや、絶対そうよ!!
なるほどね、だから新一は怒った。うん、じっくりくるわ。」

桜桃 「いや、違うだろ。」

永遠の憧れ。 &その後。

本当に、すごいな。

工藤君。

告白・・・しょうか、迷っている。

でも、今、しなきゃ後悔するし、多分、毛利さんに対しても
ひどくなる一方だろう。

でも・・・あれ???

「工藤君、私、あなたが好きでした。」

「気持ちはあるがてえけど・・・」

「知ってる。毛利さんがすきなんだよね。」

「なゝ！！！」

「私も毛利さんが好き。」

「なんかね、工藤君をどうして好きになったんだろうって思ったの。そしたらさ、毛利さんを一途に思う工藤君が好きになってた……。っていつか、毛利さんを好きじゃない工藤君は工藤君じゃない。って思った。」

「……」

「たった一人の男をここまで魅力的にする女の子ってさ、すごいよね。」

「工藤君、もともと魅力になるとおもっよ。毛利さんパワーでね！」

「……清水……」

「だからさ、もし、毛利さんになんかしたら、私、取っっちゃうから。」

「……また強敵が増えたよ……」

「鈴木さんという人もいるしね？」

「はぁ……」

前にいる工藤君は、今までみたことのない一面で、

本当に毛利さんを好きなんだなって思い知らされた。

工藤君を魅力的にしたのはまぎれもなく、毛利さん。

私にとって、毛利さんは

永遠の憧れ。

一生変わらないであろう。

高校3年・・・

もー!!!

お母さんったら、また、お醤油だって言ったのに、
違うものまで買わせる!!!

私は、あの後急激に毛利さんと仲良くなり、
「蘭」「咲」と呼び合う仲にまでなった。

高校に入学してからは、一度も連絡をとっていない。
しかし、工藤君が名探偵だなんて、笑っちゃう。

そういえば、ここで毛利さんにあっただんだけ。
醤油を手に持ち、あの時の風景が一瞬頭に過ぎる。

ふと、後の方から声がした。

「新一、今日は暑いから冷やし中華でいい？」

「ああ。お前の作ったもんなんでもいいし。」

「なにそれ〜」

工藤君と蘭！！

私は、久しぶりの友人に会うため、
心を弾ませて、軽く走る。

どんっ！！

「あ、すいません・・・」

「いえ、こちらこそ・・・」

この出会いが恋に発展するとは、

誰が予想していただろう。

工藤君と蘭が私に気付いたのは、

それから、3秒あとの出来事であった。

永遠の憧れ。 &その後。 (後書き)

咲ちゃん、最終的にはハッピーエンドですよね???

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7418m/>

First love ～恋かもしれない～

2011年10月7日03時44分発行